

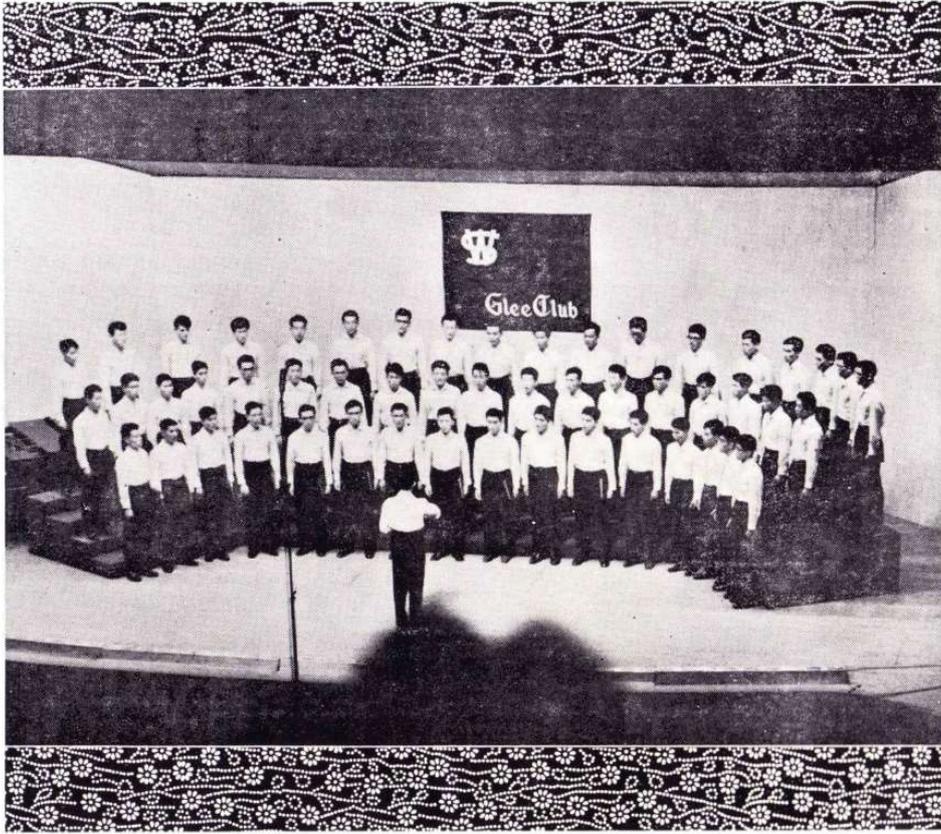
西南学院グリークラブ創立四十周年記念誌

四十年の歩み

昭和 35 年 12 月 30 日発行

①記念誌発刊によせて

- ・これは 1960 (昭和 35) 年に西南学院グリークラブ創立 40 周年を記念して作られた記念誌を 2018 年、同創立 100 周年を前にデータ化したものである。
- ・今日においては不適切と思われる表現が用いられている個所もあるが、その資料性からそのまま掲載している。
- ・誤植と思われる語句については脚注にコメントをしている。
- ・二文字の繰り返しは繰り返し記号を用いてあるが、横書きにしたため、言葉に置き換えた。
- ・地名の柳川については「柳河」を用いられており、そのままとした。
- ・久留米の「留」は「ツ」の下に「田」という字を用いている例が多いが「留」に置き換えた。
- ・毛屋禎吉氏の「禎」は示す偏に「貞」であるが、該当文字がないため「禎」に置き換えた。



Oh Seinan!

'Neath the stately pines By the ocean blue,
Stands our college fine, To thee we'll be true, be true.
Oh Seinan! dear Seinan! may thy sweet memories linger long,
Oh Seinan! dear Seinan! For thee we will be true and strong.

And the dear old campus, with its friendly shade
Where sweet friends greet us, From our minds won't fade, won't fade.
Oh Seinan! dear Seinan! may thy sweet memories linger long,
Oh Seinan! dear Seinan! For thee we will be true and strong.

Too soon we leave thy care, And part from friends so dear,
But all our fame we'll share With our Alma Mater.
Oh Seinan! dear Seinan! may thy sweet memories linger long,
Oh Seinan! dear Seinan! For thee we will be true and strong.

A Graves

目 次

一、四十周年記念誌発刊によせて

回 顧 録	水町 義夫 氏
新 し き 歌 を	河野 貞幹 氏
	古賀 武雄 氏
	伊藤 武雄 氏

On the Fortieth Anniversary of The Glee Club

John W.Shepard.Jr.

A Message to Our Glee Club

Mes. C.K.Dozier

	徳永麟之助 氏
	清水 脩 氏
思い出しますあの頃を	森脇 憲三 氏
拍手とともに	石丸 寛 氏
ごあいさつ	福永陽一郎 氏
グリーに希む	今西善治郎 氏

西南学院グリークラブ四十周年記念演奏会によせて

江口 保之 氏

森部 善七 氏

西南学院グリークラブをたたえる

木村 茂 氏

グリークラブの思い出 伊藤 俊男 氏

記念誌発刊にあたって

西南学院グリークラブでも今年で四十周年を迎えた。今年は関学・立教・青山・同志社と各大学の合唱団も、それぞれ記念すべき年を迎えたのであるが、西日本の一角に今も尚西南グリー健在の偉容を誇っているのは、ここ迄グリーを育てられた先輩の並々ならぬ努力と、グリーに対する愛情の結晶であるとグリーメン一同深く敬意を表さればならぬ。

四十年間に於けるグリーの活動も、一時の盛衰はあったにしろ、創立ミス・フルジュムの蒔いた一粒の種はすくすくと育ち樹令四十才になったのである。

この四十周年にあたり、昨年から福岡在住の先輩を交えて準備された四十周年記念行事も関係各位の御協力で着々とその成果をあげ、その圧巻はなんとといっても創立四十周年記念の演奏会であり、先輩と共にステージの上でハモったあの感激は一生胸に残るものがあるし、先輩の方も感慨を新にされたことゝ思うのである。四十年……たいしたものである。

伝統……現代のグリーはこれを支柱とし、学院のキリスト教精神の上にその精神的な基盤をおいてきたのであるが、この四十年の伝統の維持、存続の陰に幾多の先輩の血の滲むよう心努力がなされてきたことを見逃すことはできないのである。

その努力のあとを顧みると、グリークラブの創立から今日迄の過程は狭くみればただ一つのクラブ活動の発達史に過ぎないけれども、広く視野を転じてみれば西日本の合唱界を代表し得る重要な史実であり、その発展過程は現在の資料だけではつぶさに語ることはできないが大正中期から今日迄の西日本音楽界進歩過程をも示すものであり、決してこれを一小事実の史的展開と見做すことはできない。

否西南学院グリークラブの歴史はそのまゝ、西日本の合唱史の一部を形成するものでなく寧ろ今日の合唱界発展の重要な一因子であるといっても過言ではないし、そり歴史的過程に於て果たした役割は非常に大きいものがある。今回の創立四十周年記念に際してグリークラブの四十年間にわたる活動を回顧し、その変遷を記録に残すべく、さゝやかながら小冊子を発刊することゝなったこの記念誌発行の端緒は四十周年を迎えて種々の行事について、福岡在住の先輩と現役の話合いて、現在迄のグリークラブの歩みが記録として残されていないので、この記念すべき年に是非実現しようと、O・Bと現役から編纂委員を選び具体化されたものである。

かゝるクラブ小誌が日の目を見ることができたのは諸先輩の御協力と物心両面にわたる援助の賜ものに他ならぬ。

本書の資料は西日本新聞社資料室、朝日新聞社企画部、本学図書館に多大の迷惑をかけた。

また編纂にあたって西日本新聞文化部記者木村茂氏に色々と助言をうけたこと、写真資料作成については児童教育科の内海洋一氏の多大の奉仕をえたことを記し、厚く感謝を捧げるものである。

四十周年記念誌編纂委員会

四十周年記念誌発刊によせて

回 顧 録

水町 義夫

グリー・クラブ結成事情

大正八年六月頃のこと、中学部二、三年生の中の音楽ずきの連中により、ミス・フルジュムを指導者として始まった。水町が部長であった。赤レンガの講堂の建築が始まった頃のことである。切り倒された松の木に乗ったりしている写真がある。それが当時のグリークラブのメンバーである。

六尺三寸のボールデン先生、かれんなフルジュム女史、水町、伊藤、伊勢田、山田久、田沢、平野、寺田等の顔が見える。フルジュムさんは、大変声のきれいな、また熱心な指導者であった。現在、新和歌の浦に健在である。放課後、普通の教室を使って一、二時間練習した。讃美歌、又は百一名歌集等をテキストとして用いた。そして教会又は学院その他の集会を助けたのである。皆歌うことのすきな連中であるから、何も苦心というようなことはなかった。ただ楽しかったのである。

「校歌を作ってくれ」という依頼があったのは、大正九年十月のことである。その頃私は、高等学部の創立事務に当って居た。そして「ヨハネ第一の手紙」からいろいろのヒントを得、約二週間くらいで出来上がった。作曲は上野音楽学校の島崎教授である。寄せては返す波の音を思わせるような、立派な作曲である。大正十年一月、曲が出来て来たので早速練習にかかった。指導者は勿論フルジュム先生である。そして大正十年三月九日、中学部第一回の卒業式のときに歌われたのが初めてであり、今日まで歌いつづけられている。

「大正十一年三月の卒業式にまに合うように卒業式行進曲を作ってくれ」という依頼があった。それで「背振の山の雪はきえそよ春風はよきわたり」云々という行進曲を作った。譜は「みよや十字架の旗高し」であった。生徒達はよろこんで歌った。しかし戦争直前「自治と自由を柱とし」という四節目の言葉がよくないという横槍が出て、歌うことをやめてしまった。そういう時代もあったのである。

他の一面、中井先生を中心とし、井上、寺田等の諸君によって器楽部が出来、仲々盛んであった。それで器楽部とグリークラブが一緒になって演奏旅行に出かけたのである。

まず福岡をふり出しに、小倉、中津、大分、日田というような所で演奏したのである。このときは伊藤武雄さんも同行した。高等学部一年生であったと思う。中井先生、水町も同行した。総勢二十人くらいであったと思う。中津の高等女学校の講堂で演奏し、最後に伊藤武雄さんが「さらば皆様、さらば皆様」と歌って大かっさいを博したこともほほえましい思い出である。

先日、西日本新聞に「西日本音楽史」という題で、木村記者の書かれたものは興味深く読んだのであるが、その中に西南出身者の名前が沢山出てくるのに驚いたのである。今後ともよき音楽者が続々と出られるように、又グリークラブの栄えを心から祈って筆をおくことにする。

(筆者は西南学院名誉院長)

”新らしき歌を”

河野 貞幹

福岡市に西南学院が呱呱の声をあげたのは大正五年、今から四十三年前のことです。一粒の麦の様なささやか存在ではありましたが、これを蒔く者の精神は祈りと確信にみちて万難を排し、生命の芽生えを心にえがきつつ創業の献身的な努力がなされたのであります。創立者C・K・ドージャー先生は全く全身全霊西南のために献げつくされたと言わねばなりません。

この西南創立の年から三年目に当時学院の教師で若い美しいミス・フルジュムという先生の指導のもとに可愛い少年たちの合唱団が誕生したのであります。フルジュム女史御自身、大変美しいソプラノ歌手でチャペルや音楽界などで、その美しい姿から美しい声から全く圧倒される程の芸術的なこうこつ味を経験した同窓は数多いのであります。

しかし創立者ドージャー師の心にある生命の泉の流れを汲む学院の合唱は単なる歌うたいの真似事ではありませんでした。フルジュム先生の御指導も魂の奥底にある大地を貫く生命の歌を真心をこめて表明することにあつたことを教えられます。

新らしき歌を 主に向いてうたえ
全地よ 主に向いてうたうべし

その廣大無辺、大地を貫く大生命に徹したときほとぼしり出ざる讚美の歌でありました。

この精神にみちびかれて少年たちの讚歌は高らかに大地にひびきわたったのであります。この境地に於てはじめて初代のグリークラブの若い心にも偉大な西洋大音楽者の心境を理解し、幼いながらも西南グリーの地歩を確立して行ったと考えられるのであります。

創立以来四十三年。その間種々な変動があり学院も一粒の麦から芽生えて中、高、大と成長して今日に至りました。苦難の道も創立当時の精神の堅持に於て乗り越え、学院卒業生も一万六千以上となり、在院生約五千人という大きい学園の実態を示しております。或いは戦争中、又戦後の悲境も知る者ぞ知るではありますが、しかし初代からの先輩の残した学院グリーの精神は、

全地よ、主にむかいて喜ばしき声をあげよ

であり、後輩一人一人にむかって、

いざわれら 主にむかい 救いの岩にむかいて 喜ばしき 声をあげん

でありました。真に「ハレルヤ・コーラス」を大合唱出来るグリーでありました。このグリーが成長して今日に至ったのであります。私はここでグリーの先輩諸氏、指導して下さった先生方、各時代の部員各位に対し深甚の謝意を表すると共にもう一度創立者の精神に於て

いざわれら
新らしき歌を
主に向いて うたわん

と心から申し上げさせて戴く次第であります。(筆者は西南学院々長)

古賀 武夫

我が西南学院グリークラブは、その前身である西南学院高等部グリークラブ（後に高等部が専門学校に、専門学校が学制改革に伴って現在の西南学院大学となったのである）の結成から通算すると、今年（一九五九年）で満四十年となる。この半世紀に近い年月の間、部員としてグリークラブの活動に加わった同窓生は今日社会の各方面、或いは銀行、会社等において指導的な地位につき、或いは中堅層として、或いは又新人として活躍している。中には、伊藤俊雄、河野博範、内海洋一、内海敬三、志渡沢亨の諸氏のように、母校西南の大学、短大、高校、中学で教鞭を取っておられる方もいるし、中には、伊藤武雄、福永陽一郎、毛屋禎吉、長弘の諸氏のように音楽の専門家として第一線で活躍している方々も案外に多い。又、徳永麟之助、鶴原太郎、松本省一、末永直行の諸氏のように音楽家としてではないが、直接、間接に音楽と深い関連のある仕事で働いておられる人も随分多い。音楽家として働いておられる同窓生は別として、他の方面で職業人として着々と実績をあげておられるグリークラブの先輩諸氏について言えば、在学中音楽を愛し、音楽を愛するが故に部員として互いに手を取り合って、ひたむきに精進したことが、今日職業人としての働きに、又人間としての成長に測り難い何物かをプラスしていると思う。

福岡市在住のグリークラブOBが中心となって、西南シャントウールを結成している。これ等OBの方々は、卒業後も音楽に対する愛情と、在学中音楽を通して結ばれた友情とをそのまま持ちつづけて、西南シャントウールという見事な実を結んでいるのである。実に美しい、羨ましいようなことだと思わざるを得ない。グリークラブと共にこのシャントウールが年毎に新しい卒業生を加えて、今後愈々発展して行くことを願うものであります。

この思い出多い四十年の歳月、歴代の部員諸氏の音楽に対する純粋な愛情と、真剣な、ひたむきな精進とによって、又先輩諸氏の築いた良き伝統と、先輩の指導とによって、今日西南学院グリークラブは西日本における大学合唱団の中で引続いて王座を占めているばかりでなく、全国の大学合唱団の中でもAクラスとして重きをなしている。私共としてこれにまさる喜びはない。願うところは、部員諸君が今後共、学生らしい純真な気持で精進を続けて、音楽を通して自分自身を高めて行くだけでなしに、全大学を、全西南学院を高めて行くことであります。

私が学生の頃は、大学は「象牙の塔」であるとか、あらねばならぬとかいう考え方がまだ強かった。大学は一国における最高の学問研究の場として、俗世界から超絶して静かに真理の追求がなされる殿堂でなければならぬというのであります。若し真理が書籍とフラスコによってのみ見出され、或いは俗世界から絶縁した個々の学者、思想家の頭の中から作り出されるものであるならば、大学は象牙の塔であ

る方が正しい在り方であるでしょう。

然し、厳しい社会的現実と劇しい時代の流れから超絶して、個々の学徒が塔の中に孤立してメタフィジカルな思辨を重ねてもそこからは生きた思想が生み出される訳ではない。人文、社会の諸科学は勿論、自然科学ですら社会的、時代的現実を離れて育つものではない。

社会との交流なしに、学問も芸術も花を咲かせ果実を結び得るものではない。劇しく動き流れる現実の中から、永遠なるものを見出されるのである。大学が学問と教養の場としてその機能を十分に遂行するためには、もっと大学と社会とは緊密に結び合わねばならない。西南のグリークラブは、音楽を通して我が西南学院と社会との親しい結び付きの糸口となって来た。このグリークラブの働きを通して更に西南が学問の面においても、宗教の面においても、スポーツの面においても、社会に働きかけ、社会から学問発展の肥料を吸収しつつ、西南で結実した見事な宗教の、学問の、芸術の果実を社会に提供しようようにしたい。

今後グリークラブが音楽を通して、福岡市に、県に、全九州に益々多くのものを寄与出来るよう成長、発展することを祈って四十周年記念の挨拶と致します。

(筆者は西南学院大学々長)

伊藤 武雄

西南のグリークラブが四十年になる由、さてさて年が経つのは早いものと感じます。

小生らが細々と始めた頃の猛者は、伊勢田君をはじめ死んでしまったのも大分いるようです。あの頃、河野博範教授はバスの名手でした。尤もあの頃は井上精三氏を中心とする絃楽合奏の方が盛んでした。合奏の方は中井と云うヴァイオリニストが指導していました。合唱の方は指導者なしでした。いつもプログラムの終りに、「さらばふるさと」を出して、最後の節で、「さらばみなさま」と歌ってやっと合奏に匹敵するだけの人気をとり結ぶことが出来ました。

合奏にしても合唱にしても、どんな音を出していたものか今考えると全くの冷汗ものであります。

さて、今日のグリークラブはそれに比べると隔世の感がある程進歩したと信じます。然し、合唱を楽しみ、学院生活を豊かにしようとする気持は恐らく同じではないでしょうか。

はるかに満腔の喜びをお伝えしたいと感じます。

(筆者は昭和二年旧制高等学部文科卒・グリーOB・声楽家)【四十周年記念ステージプロより】

ON THE FORTIETH ANNIVERSARY OF THE GLEE CLUB

Congratulations to the Glee Club on the completion of forty years of its history. During these forty years it has made thousands of people happy with its songs, won many honors, and established a great tradition. It has given to hundreds of students who have served as Glee Club members a happy memory of their college years. It has brought fame to Seinan Gakuin through its accomplishments. Certainly we can look back over these forty years with a sense of pride and achievement.

As faculty advisor of the Glee Club for the past seven years, it has been my privilege to share in many of the events of its recent history. I have attended most of the annual concerts held in the city of Fukuoka. I have been present when the Glee Club won the local and district contests during the past years. Sometimes I have traveled to nearby cities in Kyushu to be present for concerts during the summer concert tour. I have been with the Glee Club to Air Force Bases for special Christmas concerts, and have had a part in the annual Christmas programs with Seinan Jo Gakuin. I have enjoyed the "Singing Christmas" each year with the Chanteurs.

But the greatest pleasure has been the personal contacts I've had with the Glee Club members through the years—attending practices, going to welcome parties for the new members and farewell parties for the graduates, and having the Glee Club in our home on special occasions. For allowing me to have a part in the life of the Glee Club during these years, I am deeply grateful. I think of many of the fine young men who sang with the Glee Club and graduated, and who after many years remember the Glee Club and continue to give it support. I think especially of those who have led the Glee Club, the directors and managers, whose leadership abilities continue to be seen in their contribution to the social and cultural life of Japan.

The most vivid experience of these seven years was that when Ozaki-san was killed in an automobile accident a few years ago. Ozaki-san had a beautiful tenor voice, and he loved to sing as much as anyone I've ever known. I remember the way he sang at the Christmas party a few days before his death. When the news came that he had been killed, I could not believe it. I remember the funeral at Kego Church, when the members told about Ozaki-san's hard work and his love of the Glee Club. I remember the way in which the Glee Club sang that day, with all its heart. That experience stands out to me as a symbol of the spirit of fellowship and unity with which the Glee Club works. When I think of the typical Glee Club member, I think of Ozaki-san, who loved to sing and gave everything for the sake of the Glee Club.

During these seven years there have been hard times and easy times, failure and success. But the spirit has always been the same, to give all one's strength and to do one's best. Though there are many members who fall out each year for various reasons, there have always been those who have continued to work hard during all their college years for the sake of the Glee Club. Through all the years, I have admired the faithfulness with which the Glee Club practices each day, working for hours on one piece of music to be able to sing it in the best way. There have been those with unusual

musical talent in the Glee Club through the years, but it has been the pride of the whole group and its determination to do its best which has made the Glee Club what it is.

I think there has been steady improvement through the years, that the Glee Club has grown as Seinan has grown. We have a right to be proud of the accomplishments of the past. But there is a saying in English, "Hats off to the past, coats off to the future." When we take our hats off, it means we are giving honor to someone. When we take our coats off, it means that we are going to work. We honor the past of the Glee Club for its accomplishments and tradition. But now we must work even harder, so that the next forty years will be even more glorious than the past.

John W. Shepard, Jr.

(筆者は西南学院大学教授・グリークラブ部長)

A Message to Our Glee Club

How important it is to keep an exact record of our institutions!

There is no record of the time when the Glee Club of Seinan Gakuin began about 40 years ago. But from its very beginning it was making friends for the school. As early as 1920 it gladdened the hearts of the Woman's Domeikai at Sunoko Machi Baptist Church, by singing two beautiful hymns as double Quartettes. The Glee Club often sang in college chapel and when the English Speaking society had¹ special programs they also helped with beautiful selections. They did much in building the Seinan spirit. Members of the English speaking faculty — Misses Baker, and Fulghum and Dr. G. W. Bouldin helped direct and encourage the Club in the early days. Compositions of Schubert, Beethoven and other famous musicians were sung by the Club. When Mr. Nakai, teacher of violin organized a string orchestra in the school, concerts were given by the Glee Club and orchestra that delighted large audience in Fukuoka. On October 12, 1935 the Glee Club and orchestra went to Kokura to assist in a welcome Concert for Miss Helen Dozier, the new music director of Seinan Jo Gakuin.

Mr. R. Tokunaga, who held a teachers license from Kyushu university for teaching music in high schools, was director for several years and brought the Glee Club singing into local popularity. The dictionary says, “Music is the science or art of pleasing by intelligible or expressive combination of tones.” Seinan was pleased with the high toned music that the Club presented to the public. The purpose of the Club was to please and elevate the taste of its audience.

There are many popular songs today that are not music. They are little more than a noise, that do not create a desire for the happier better things of life. A popular song of a few years ago was — “I am forever blowing bubbles, pretty bubbles in the air, Like my dreams, they fade and die.” Is it wise to use our times in practising² songs that do not please³, elevate, or give purpose to life? The history of a nation is portrayed in the songs they sing.

The world is literally filled with music. Christianity is a religion of song. It is full of major, not minor tones. It brings peace, faith, hope, and love to the human heart. The story of the first Christmas began with music.

That music sung by the angels was understood by lowly shepherds and filled their hearts with joy and hope. The Bible closes with an Alleluia chorus. All music is not light lyric, but some of the world's most beautiful music gives comfort and assurance to hearts that are lonely and sad, such as Tennyson's famous song, “In Memoriam” .

Music can only bring true joy when the audience understands the words of a song. “The Swedish Nightingale” Jenny Lind, has given the world an illustration of the purpose and effect of singing. As she was going to U.S.A. for her first concert tour she said to the captain of her ship, “I wish I could

¹ 原文のまま : had か?

² 原文のまま : practicing?

³ 原文のまま : not please?

see the sun-rise at sea.” He called her early next morning. She stood beside him and watched the changing colors in the eastern sky. Then suddenly the sun seemed to leap from the horizon. Spontaneously she burst into song, unconscious of the Captain and sailors, she sang Aria after aria of Handel's “Messiah” Then, she unashamedly changed into a sublime climax. As she sang, “I know that my Redeemer liveth”, her faith in the unseen God echoed in the hearts of the sailors they too, knew better than ever before that our Redeemer lives. She said, “I always sing to the glory of God. Such singing strengthened countless numbers of people all over the world.

The world's famous Melba—who was said to have a voice as precious as gold, sang to do Marian Crawford. As she sang she saw tears streaming⁴ down his face. She did not want to ask why he was so moved, so she said. “Will you please write your name in my address book?” He wrote in her book, “I believe in the resurrection of the dead” Melba had sung the message contained in Jno. 11:25. When the beautiful singer read this words she said, that that was the greatest tribute she had ever received, “Music leads, not drives men to God.”

Franz Joseph Hayden became famous for his musical compositions. When he was old and feeble his admiring friends carried him into the concert hall where his beautiful oratorio, “The Creation” was being given. When the chorus sang the famous passage “Let there be light” the audience rose and cheered again and again. The old musician pointing heavenward exclaimed, “It came from there” . “It Came from there.” His great music was inspired.

We rejoice in the splendid work of Seinan Gakuin Glee Club. We hope that you will inspire people all over Japan, by your fine singing. The Seinan Glee Club can best please the audience when it sings in the language that is familiar to those who hear. Music sung in language that is not understood by those who sing it, and also poorly pronounced in a foreign tongue, cannot have the pleasing effect that it would have if the meanings were understood by the audience. Most people enjoy your program in English and Japanese. We believe⁵ Seinan will promote friendship with the rest of the world through its Glee Club. Carry the Seinan Spirit wherever you go.

Mes. C. K. Dozier

(筆者は創立者C. K. ドージャー夫人)

⁴ 原文のまま : tears streaming ?

⁵ 原文のまま : believe ?

徳永 麟之助

西南学院グリークラブが四十歳を迎えた。学院の創立と共に歩いて来たようなものだ。学友会の一つの部が此の様に学校の創立と同様に発足、今日まで歩き続けて来たと言うことは特に意義深く全くお目出度いことと御同慶に堪えません。現在のグリーメン諸君と共に、そして今日までグリーを育てて来られた先輩の皆さんと共に喜びを頌ちたい気持ち一杯です。赤ん坊が四十歳になったわけです。人生四十年と言う齢を重ねて行くうちには、時に風邪に、時に大忠に罹ることもあるでしょう。ややもすれば命を失うことすらあるでしょう。しかし又一面病魔を克服して、今日ある人は多くの得難たい経験と試練を経て来て立派な社会人としてお役に立っているわけです。グリーが四十年をけみして今日あるまでには、やはり風邪を引き或いは栄養失調に陥ったこともあるのでしょし、或いは又些か栄養状態のよい特機もあったでしょう。しかし戦争という大疫の前には氣息えんえん、倒壊寸前まで追い込まれたこともあったのではないかと思います。しかし終戦後はその様な傷跡を克服して専ら成長の一路を辿り今日の様な成果を得たことは、何と言っても戦後に於けるグリーメンの撓まざる努力と歌おうとする意欲の盛り上がりが今日あらしめたものと思います。二十数年前のグリーを回想すると、よくぞここまで成長しつものかなと懐旧の念に胸が一杯です。且つてのグリーメンの一人として何とも言えない喜びと感激に満ち溢れるばかりです。しかしそのことを思うと同時にこの様な成長の反面には学院当局の理解と援助、それからグリー先輩諸氏の物心両面の協力激励がどれ程大きかったかと言うことを見逃がしてはならぬと思うわけです。シャントールの誕生と発展こそはグリー成長の大きな牽引力となっていることは恰かも関学に於けるグリーとそのOB合唱団との関係と同じことと言えましよう。シャントールの存在はグリーに対する声なき激励として感謝してよいことではないでしょうか。

抑も学校グリーの存在及び成長には一つの大きな制約とブレーキがあります。四年間という在学期限とそれから来る毎年の新陳代謝がそうです。この新陳代謝こそは合唱団の成長に実に大きな支障を来たすものです。しかし学生であるからには卒業という事実をいかんともし難たいわけです。——それ故にこそOB合唱団の存在の意義の一面も存在するわけです——だからと言ってこの事実の前に頭を下げて成長の芽を自らはばむ様なことがあってはならない。その様なことが学校グリーの宿命として、西南グリーもすでに極限に来ているのではないか等と考えることはもっての外です。

確かに西南グリーもある意味に於いては壁にぶつかっているのかも知れない。しかしまだまだ決して宿命的なものとしてあきらめるには余りにも小さな壁であり余りにも消極的である。西南グリーの前には今後打ち破って行かねばならぬ壁がある。その壁を打ち破ることこそ今後グリーに残された重要な課題であると思います。今の段階から今一步跳躍して進むことが要求されてよいのではないのでしょうか。今一步うまくなるということが要求されてよいのではないのでしょうか。

基本的専門的発声の訓練、専門家の専門的な指導等々の点に於いても今後開拓される可き分野が残されているのではないのでしょうか。この残された部分がどの様にして達成されて行くかによってもっともっと“うまくなる”ということに近づいて行くでしょう。

アメリカのロバートショウ合唱団成⁶いはデポア合唱団のうまさ、美しさ、又合唱団としての能力については皆さんのすでに御承知の通り。その合唱団のメンバーは決して歌うことのみを生業とした人の集りではない。むしろ素人の集りである。生業の余暇をさいての訓練と研究があのような上達を招いている。

⁶ 原文のまま：或い？

この様な合唱団と学校合唱団を軌を一つにすることは出来ないことは前述の点からも考えられることだけ、学生という立場に於いてもなお今後打破すべき諸々の壁をのりこえて、もっとうまくなることが要求される可きではないでしょうか。

日日成長しつつあるグリーが不断の努力と研究によって更にうまくなり、本当の合唱をやるということまでつき進んでいただきたいものです。四十年の歴史に更に光を増し、四十年間の経験者として学校合唱界にその雄を誇示していただきたいと切望する次第です。そのために諸君の層一層の御努力を期待すると同時に先輩諸氏の協力と愛情が常に加えられるよう町の一角から祈っている次第です。西部地区に於いて王者として君臨することが出来ても、まだまだ“うまくなる”という点に於いては超えて行かねばならぬ広い広い原野が広がっています。御祝いの言葉が大変な忠告めいたいやなことになったようです。誠に申し訳ないことと思いつつグリーの発展を心から祈りつつ筆をおくこととします。

(筆者は昭和六年旧制高等学部文科卒・グリーOB・RKB経理部長)

清水 脩

創立四十周年記念演奏会おめでとう。

一と口に四十年というけれど容易ならざる年月です。伝統がきづかれるためには、やはりこの位の年月が必要でしょう。伝統というものは妙なもので、一度きづかれるとちょっとやそつとでくずれるものではありません。しかし、やはりそれを維持してゆくことは相当の努力が必要です。西南学院グリークラブ、四十周年を一つの段階として、飛躍的な発展をなされるよう祈っております。

(筆者は作曲家・全日本合唱連盟常任理事)「四十周年記念ステージプロより」

思い出しますあの頃を

森脇 憲三

私が福岡にまいりましたのが昭和十六年の四月ですから、物資も統制されて、隣組だの配給の時代です。その私も実は文部省の配給で福岡にやられたわけですが、そうですね、只今の学生諸君はまだ小学校一、二年の鼻タレでしたでしょう。

福岡には古い伝統の合唱の盛んな学校があることは聞いておりましたが、どうも合唱の声としては、私の記憶に残っておりません。

松本省一さんの指揮の姿は、はっきり印象に残っていますのに、それがグリークラブであったのか、それともライラック合唱団なのかははっきりしませんが、両手をクルクル前の方に輪をかく様な指揮ぶり、大変珍しいものとして印象にあったわけです。当時の九大コーロステラ合利団混声のどの曲も必ず上ずる演奏を市の記念館で聞いた事は、はっきり覚えているのに、グリーに関してはどうしたものか声として残っておりません。

その頃です。福永陽一郎君が私のところに上野音楽受験のため、ソルフェージュと聴音を勉強に来てい

ました。彼の口から西南の合唱の話聞いた記憶がないのも妙です。私も当時女子師範の高橋暁夫先生がやってらした「あかつき合唱団」のお手伝いをはじめまして、合唱指導を始めてのホヤホヤだったからかもしれないし、戦災に遇って当時の写真まですっかり焼いてしまって、忘れていたのかもしれない。残念です。

何と言っても、私の頭にハッキリ残っている最初のは、戦後の石丸寛さん指揮のグリークラブです。それもその筈、まあ言ってみれば福岡合唱界でのライバルでしたから。合唱と言えば西南グリーの色彩な福岡に、森憲が現れたのですから大変だったらしいです。

石丸寛さんのヒットは、彼の編曲するロシア民謡でした。ボンボン最強の *ff* から、スーンと最弱音 *pp* に移る演奏効果は、大変魅力だったのです。ところが私には、その演奏法が、効果ばかりねらったものに思えてなんとも早居たたまれませんでしたのにこの演奏法が大変流行しまして、「なげかわしや」と、ヒフンコウガイしたものです。私のガイタンぶりが、学生諸君に伝わったのでしょうか。石丸でないとも夜も日もあけぬ諸君にとっては目の上のクンコブでしたらしいです。その反応が、森憲の演奏は独唱的で、あの声は合唱の声ではない、と評されたものです。合唱だって声の音楽だからバリバリ出して何が悪いのか、これが又私の反論になると言うわけです。現在日本の合唱界の最大の悩みは「声の訓練」ですが、その頃からこの問題の斗争が始まっていたとも考えられましょう。なつかしいあの頃の思い出です。

(筆者は作曲家・指揮者・福岡学芸大学教授)【四十周年記念ステージプロより】

拍手とともに

石丸 寛

ひとくちに四十年と言っても私の生まれた頃からだと思えば、心からおめでとうを言わずにはおれません。このながい間、関西の同志社グリークラブや関西学院グリークラブと共に、九州の西南学院グリークラブは立派な活動をつづけてきたことで知られています。

私も戦後の荒廃した中で、たまたま福岡に住んでいたおかげで西南グリーのイガグリ頭の学生さんでスタートした次第でした。旧校舎のレンガづくりの講堂で毎日のように陽が暮れて楽譜が見えなくなるまで練習しました。当時のグリーメン達は夜になるとなんとなく私の下宿に集っていろいろと音楽談義に花を咲かせ、夜道を菩提樹を歌いながら帰って行きました。日一日とグリーメンらしく成長してゆく若々しい学生たちを見ていると、しみじみと幸福を感じ、私は寒い下宿の一部屋で睡れないこともありました。

音楽というものは、よく考えてみると何ものにも換えがたい不思議な宝です。それはダイヤモンドや大邸宅のように或種の人たちだけが持てるのではなくて、誰でも……全く誰でも自由に持てるのです。私たちの心の中にそれがしのび込んでくる時、またそれが一ぱいに心の中に溢れる時、こんなに美しい宝を持ち得る人間ということに深い感謝をささげたくになります。職業としている音楽家もアマチュアの音楽家も、或いは又、自分では何もしないで聴くだけの趣味の人も、交響曲からシャンソンやロカビリーにいたるまで、音楽によってどれだけ慰められ、豊かになり、生命力を得ているか、はかり知れこいものがあります。

西南グリークラブはそのような音楽の美にあこがれる人のながい歴史—伝統を持っている立派な団体です。これはいつまでも伸ばしてゆかねばなりません。つまり金ボタンの制服を着ている間だけの音楽であっては意味がないのです。その意味から古い大先輩も含めての今回の四十周年記念演奏会に私は心から拍手を送りたいのです。おめでとうございます。

おめでとうございます。

(筆者は指揮者・作曲家)「四十周年記念ステージプロより」

ごあいさつ

福永 陽一郎

西南グリークラブの記念すべき四十周年の演奏会を指揮することが出来るようになり、私は無上の光栄を感じております。などという型どおりのあいさつをするには、私の気持はあまりに未整理のままの現状にあります。

西南学院……という言葉が私の心の中にまきおこす様々な光と影、そこのグリークラブにまつわる際限のない思い出。そこには私の少年時代から、人呼んで云うところの青春時代の、喜びと哀しみと、甘さとほろ苦さの人生の表と裏が筆につくせない複雑さをもってひそんでおり、こうしてその一端にでもふれようとすると、手に負えない程のはげしさを以って、私の頭の中でうずを巻いてしまうのです。

西南グリークラブを指揮することは、私のある時期の大きな夢の一つでした。ときにはそのことが実現しないのをいらだたしいと思ったこともありました。私は元来生意気なたちなので、私に指揮させれば西南グリーはもっと上手に唱う、などと思ったりしていたのです。けれども初めて西南グリーの前に立って指揮することになると、はたして十分に責任をはたせるのかどうか自信がぐらつきそうです。ただ私に出来ることは、専門の音楽家達を相手に立つときと同じ誠実さを持って、西南学院グリークラブを指揮することだけです。そこに生み出されるべき「音楽」に対してまごころをこめて奉仕するだけです。そして、私か個人的に抱いている西南学院とそのグリークラブに対する愛情が、メンバーの方たちと私か協同して作り出す「音楽」を一層輝やかしいものにしてくれることをかたく信じております。

私の心からの願いは、この音楽会が聞きに来て下さった同情ある方々にとって満足すべき一夜に終るだけに止まらず、四十周年の記念すべき発表会にステージを共にしたすべてのメンバーの一人一人にとって、一生忘れ得ぬ青春の貴重な一瞬であるように、という事であります。そうした光と喜びに満ちた時間を私も共々経験させていただくために、私は私に出来得るかぎりの努力をこの会につき込みたいと、心に強く決めております。

私のわがままを許して協力して下さった多くの方々と、多忙なお仕事の時間をさいてお集り下さった方々に深い感謝を捧げております。

(筆者は昭和二十八年神学専攻科・グリーOB・藤原歌劇団常任指揮者)【四十周年記念ステージプロより】

グリーに希む

今西 善治郎

西南学院グリークラブが創立四十周年記念演奏会を開く。誠に喜びにたえない。戦前の西南グリーを知らない私は、このプログラムに記されるであろう四十年の足跡を読ませて頂くのを楽しみにしていると共に、この四十年間、陰に陽にグリーの成長の為に指導べんたつして下さった多くの先生方、諸先輩、後援者に対し深い敬意を表したいのであります。私は昭和二十一年、姉妹校西南女学院に来てからは、何かと現役や先輩の諸兄と共に唱い、語らい、食らう機会を得、『善やんのオヤヂ』なるありがたき称号まで頂き誠に光榮に存じている次第なんです。

今更改まって祝辞でもないと思いますので今後のグリーの発展を祈る切なる心から二、三気づいた事を書いてお祝いの言葉にしたいと思います。『お祝いに来て説教かつ……でも持って来い』なんて君、怒り給う勿れ。持って行くよ、持って行くよ。

一、西南は県下の純対数に於いて同志社や関学、早稲田と比較にならない程すくない。一般的に言って、従ってメンバーの数もすくないと考えられる。これは他校と比較されるとき言えない苦しさである。然るにこの中で最大効果をあげる事が西南グリーに対する課題である。

二、『西南グリーの声はきれいだが感情がない。人間味に乏しい』と言われる位すみきった、透徹したパートの声によるハーモニーはどんなものだろう。人間味豊かすぎる声の合唱が多すぎるから。

三、各パートに二、三人位は声楽のレッスンを専門に受ける人がいて、いやいなくてはと思うんだが。(いるのか知らないが)

四、メンバーの中に二、三人は単位も(学問じゃない)、就職も、彼女も棒にふって、棒をふったりふられたりする人もあっていいな。

五、ここが一番説教くさくとられると思うのだがあえて言う。グリークラブは学院及び学院の鼓舞せんとする精神と遊離した存在であってはならない。又、学友会の一部であるグリークラブは学生大衆の生活とかけ離れた存在であってはならない。前者に忠ならざれば西南グリーと言うにふさわしからず、後者に於いても学生の日常生活を無視していくらキリエレイソンを上手に唱っても意味はないと考える。高いテクニックを身につけるため努力すると共に、学生に愛される、学院の精神に忠実なる西南グリークラブの今後の発展は単に関係者のみならず全国の合唱ファンの期待する所である。

西南グリーの諸君、ガンバレ！！

(筆者は西武合唱連盟理事長・西南女学院短大教授)【四十周年記念ステージプロより】

西南学院グリークラブ 四十周年記念演奏会によせて

江口 保之

私が西南学院という学校の存在を知ったのは昭和七年の夏だから随分前のことになる。その頃の西南学院グリークラブはチャペル以外の演奏活動は殆んどしていなかったように思うし、ステージも今は中

学校の講堂になっている、赤レンガの建物から外に出たことは殆どなく、出たとしても、クリスマスになってバプテスト系の市内の教会に進出する程度であったと思う。

昭和十七年の四月、私が西南学院に着任して運動場で着任式があった時は、東京に初の空襲があつて、福岡市も警戒警報第一号が発令されたけれども、玄海の海の空はあくまでも澄んでいて重大なことが、何か他の国の出来事のようにしか思われなかったことを今でも想起しますが、この頃からグリークラブも多難な道の第一号に突入したと考えられないこともない。戦後の西南学院グリークラブの活動はまことに目覚ましいもので、その歩みは多分別表にあると思うので省略致しますが、西部合唱連盟福岡支部としてはまことに心強い加盟団体で大学の合唱団の支柱としてのみならず、すぐれたメンバーの一人一人がいろいろの一般の合唱団の中に入って行き、男声のささえとして活動しておられることを本当にたのむしう次第です。

西南グリーは合唱音楽を楽しむ段階はすでに卒業していますので、これからはすぐれた演奏を残すことに努力しなければならないと思います。目下のところどのような曲も端正に、そつなく、楽しんでいくことが出来る演奏をしますが、それだけにこれだけでは西南グリーの一大特徴という決定打に乏しいように思います。私としては、学校の性格上、ルーテル時代の前後百年間くらいの宗教曲を徹底的に研究して、この方面に於ける日本の代表になっていただきたいと思っています。限られた短かい学生の期間にのぞむことは、無理なことのようですが、つきかさねられていく努力は伝統となり、血となり肉となることと信じます。この記念すべき年を意義あらしめるために、西南学院グリークラブよ前進せよ、頑張れ、そしてキリストに忠実なれ。

(筆者は西部合唱連盟福岡支部長)【四十周年記念ステージプロより】

森部 善七

風土の中から生まれた生活感情と行動、赤毛と日本人とはまるで違う。それなのに学生演劇とは多少ちがうが、音楽といえば横文字ばかりを盲目的にあがめる人が多い。もとより音楽を学ぶためには必要であり、横文字のまま歌わねばその曲本来の価値をなくすこともあろう。だからといって日本の言葉の忘れてもらっては困るのだ。めでたい日によけいなことだが一言。

六大学合唱祭で西南グリーが民謡をとりあげてくれたことは、だからうれしかった。しかも民謡のもつ情緒をよく生かして。

四十年前といえばブーゲンビル海域で戦死した長兄が、西南中学生として一時籍をおいていたころではなかろうか。その縁故からして懐しい。

(筆者は朝日新聞記者)【四十周年記念ステージプロより】

西南学院グリークラブをたたえる

木村 茂

四十年という歳月は、芸術の世界——とくに日本の洋楽の分野では実に長い歳月です。西南学院グリークラブが四十年もの歩みをつづけてきたことは、ただそれだけでも賞賛するに値いすることです。西日本の楽壇の誇りの一つでもあるわけです。音楽を愛するもの一人として、西南学院グリークラブに、心から『おめでとう！』とお祝いのことばをおくりします。そして、こん日までグリーをしっかりと守り、育ててこられた、歴代のグリーメンの方々に敬意を表します。

別に西南学院の出身でもない私ですが、こん日までのグリークラブの歩みを高く評価しています。ちょうど、グリークラブが創立四十周年記念演奏会を開いたころ（昭和三十四年八月）私は前後四ヵ月間にわたる『西日本洋楽ものがたり』という連続読物を西日本新聞の文化欄に執筆していました。約四百年前、日本にはじめての西洋音楽がこの九州にもたらされ、今日の音楽の氾らんとするまでの歴史を、新聞記者らしく、コツコツと足であつめた資料で綴ったわけです。この過程で、当然、西南学院グリークラブの創立のころのことにもふれ、杜氏の様子、その後の歩みなど、あちこちで聞いたり調べたりしました。その結果得たものは大きなおどろきでした。古い時代ということなら、男声コーラスの誕生は、同じ九州に、もっと古い、大正初期に誕生したものもあるわけですが、その後の歩みの輝かしさは比較にならぬほどで、西南学院グリークラブの右に出るものはありません。また同クラブ出身の多彩、有能な顔ぶれの多いことも他に類がありません。それに、私がつもつうれしく思ったのは、グリークラブのOBが、古いグリークラブの思い出話をしてくれるときの楽しそうな、明るい表情です。グリークラブの話はずいぶんいろんなOBの方から聞きましたが、そのうれしそうに話してくれる表情は、たった一人の例外もありませんでした。いつの時代もグリークラブはそんなに楽しい集まりだったのでしょう。その理由は一きつと、みんな本当に合唱を愛する、いい若者ばかりの集まりだったからにちがいません。それが西南学院グリークラブのいいところです。四十年もの輝やかな歩みの“秘訣”はそんなところにあるのかもしれないな…と思ったものです。

また、この四十年の間にグリークラブから巣立って社会に出た人々を見渡し、その人たちがしてきたこと、いまやっていることを見ると、これも驚きに値します。西日本、九州の楽壇の推進力として働いた人、働いている人が何と多いことでしょう。だからグリークラブが西日本の楽壇の大きな推進力としての役割を果たしてきたといっても決してオーバーではありません。さらに、中央の楽壇でも忘れられない人たちをも産んでいます。実にたのもしいかぎりです。

私の仕事の過程でただ一つ残念でならなかったのは、せつかくの西南学院グリークラブの四十年の歩みの歴史が、まとまっていなかったことです。それが、こんど見事にまとめられたというのですから喜ばしいことです。それにしても、さぞ大変な仕事だったでしょう。私にはその苦勞が想像できるようです。歴史が整理されていなかったというのは、やはりいまわしい戦争のおかげでしょう。グリークラブが中断され、空白の数年をつづけたのも戦争のためでした、戦争というのはグリークラブにとっても最大の敵というわけです。（このことも、今後ともグリーメンの脳裡に刻んでいただきたいものです。）

西南学院とは直接のつながりはない私ですが、考えてみると、ずいぶん間接のつながりは多く、親密感は一倍です。私の母校は西南学院とは隣組の修猷館ですし、教会（福岡市箕子町のバプテスト教会

です)でお世話になった下瀬牧師、菅野牧師らも西南学院の方々でした。東京の学生時代お世話になった熊野牧師、あるいはバリトンの伊藤武雄氏……みんな西南学院の人たちです。音楽を通じての数多い友人、音楽の先輩にも西南学院出身の人たちが実に多いのです。だから人一倍、西南学院グリークラブに愛情を抱きたくなります。注目していただくようになります。

四十年の歩みは賞賛に値いするものですが、それよりももっと大切なことは、これからさきのことです。西南学院が四十年を迎えた同じ年に、同じ地元の九州大学オーケストラは五十年を、混声合唱のライラック合唱団は二十年を迎えました。それぞれこの年を一つの里程碑として、新しい飛躍をはじめています。どうか西南学院グリークラブも負けずに、この四十年を迎えた年をエポックとして、新しい飛躍の時代に入ってほしいものです。過去もそうであったように、これからも決して坦々とした道ではないでしょう。しかしいつの時代も、明るい、本当に音楽を愛する、いい若者ばかりの集まりが西南学院グリークラブの伝統——大いに期待しています。これからの、いつの時代にも西日本(いや日本の)楽壇の推進力——それも新しい時代にふさわしく、ジェット推進力、原子推進力といえるようなたくましい、強い推進力であってくれるよう期待したいものです。グリークラブに対して、この期待は決して過大ではないと信じています。

(筆者は西日本新聞社文化部記者)

グリークラブの思い出

伊藤 俊男

西南学院グリークラブの創始者フルジュムさんが日本に、というよりも、西南学院に宣教師としてみえたのは大正七年の四月ごろだったと思う。当時の講堂兼武道場、今の高等学校の柔道場でオルガンを弾きながら。“Shall We Gather at the River”その他を歌われ、顧問格の水町義夫先生をはじめ、腕白ざかりのわたしどもが深い感動をうけたものであるが、あの時の印象は終生忘れられまい。

当時はまだ福岡も筑前ビワや、琴、謡曲が全盛で、洋楽とっては、九大の榊博士のひきいるフィルハーモニー交響楽団が年一回の演奏会を行い、時たま荻野綾子や関鑑子の独唱会がある程度であった。

それから数年後、西南学院に管絃楽団ができた。指導者は当時九州女学院の音楽の先生をしておられたヴァイオリニスト中井氏で、これがまたなかなか熱心な指導者であったので、一年あまりすると、九州一円、山口あたりまで足をのばして演奏旅行をするようになり、行く先々で非常に歓迎された。聴衆の過半数は旧制の高校生、女学生などであった。もちろんグリークラブも一緒に旅であるが、両方ともやる者が相当いた。

そのころの主要なメンバーは、伊勢田崇(チェロとベース)河野博範(ベース)井上精三(第一ヴァイオリン・ベース)田沢耕三(ヴィオラ・テナー)牟田義信(ヴィオラ)伊藤武雄(セカンドヴァイオリン・バリトン)田中幸利(バス・テナー)小松真佐己(テナー・ピアノ)尾崎圭一(テナー)それから私(チェロ・ベース)などであった。

もうそのころには洋楽熱も次第に高まって来て、世界的なジムバリストや、ハイフェッツ、クライスラーといった面々がちょいちょい福岡にも姿を現わすようになっていた。

さて、以上のようなことは他の方々の思い出ばなしに出ることであろうから、残った紙面をお借して、私と弟のことを少しばかり述べて、責めをふせぎたいと思う。

私は中学三年のころから我流でオルガンを弾きはじめ、ついで姉のヴァイオリンを横どりして弾きだしたが、それまで母の見よう見まねで筑前ビワをやっていた弟がヴァイオリンをやりだすと、何しろ熱心なのと、天分があったのとで、たちまち私などは足元にも寄りつけなくなった。そこで私は、もっぱらフルジュム先生のもとに通い、声楽に励んでいたのであるが、ある日先生が言われるには「あなたの弟さんの声とてもいいです。ぜひつれていらっしゃい。」

弟はこうしたことからグリークラブに入ったのであるが、これまた、たちまち頭角をあらわして、さきに述べた演炎旅行では合唱中の独唱など立派にやってのけられるようになった。ヴァイオリンはやる、ピアノはやる、歌は歌うでぜひとも音楽学校へということになり、高等学部二年を終えて上野の音楽学校に入学し、現在バリトン歌手として、またオペラ歌手として、楽壇に重きをなしている。

話が前後して申訳けないが、フルジュム先生は宣教師ではあるが、音楽を専攻し、歌によって伝道するために日本に来られたのであった。美しいコントラルトであった。後には少し声がわるようになって残念であったが、市の記念館で独唱会（何かの記念事業募金のため）をやられた時には大変な評判であった。後、九大出身の医者上原某氏と結婚され今は和歌山におられる。十年ばかり前、私か渡米の途中、船内に十七、八のかわいい、フルジュム先生そっくりのお嬢さんがおられたので、ぶしつけとは思ったが、「あなたは上原さんではありませんか？」と聞くと、びっくりして、「どうして、わたしを御存知で？」と答えたので、自分が西南学院で、先生に教えを受けた伊藤だ、と言うと、母から御兄弟のことは度々聞いています。でも、どうしてわたしがおわかりになりましたの、そんなに母に似ていますかしら、ということになって、一緒に記念の写真をとったものであった。

（筆者は大正十四年旧制高等学部文科卒、グリーO・B、西南学院大学教授）